

## 貴族日記のおはなし二題

松本 昭彦

○『明月記』における「月」の記述

藤原定家の日次記が『明月記』と称されるについては、同じく定家の歌論書『毎月抄』に「去る元久の比、住吉参籠の時、汝月明らかなりと、冥の靈夢を感じ侍りしによりて、家風にそなへんために、明月記を草しをきて侍る事、身には過分のわざとぞ思ひ給ふる」とあるのが参考にされたこともあつた。しかし、ここに言う「明月記」は「家風にそなへんため」とあることから歌集（家集）であると思われ、また日記の『明月記』は「元久の比」より二十五年ほど前の治承年間の記事が現存していることから、この『毎月抄』の記事を日記命名の由来とすることはできない。日記が「明月記」と他称されるようになったのは、家集『明月記』の存在もヒントになっているのかもしれないが、やはり日記自体の性格によるものと思われる。ここで、『明月記』中に見える「月」の記述のありかたの特徴を見てみることにする。

まず、他の貴族日記にも共通する記述のありかたとしては、夜間の天候を月が出ているか否かによつて示すものと、宮中を退出したりする時の時刻を表示する機能を持つものがある。前者は、寛喜二年（一二三〇）五月九日条に「夜より雨降る。未時天晴れ、又急に雨。夜月明し」、同十三日条に「終夜今朝雨降る。午後天晴れ、夜月見ゆ」といったも

ので、朝や日中の雨に対し夜は晴れたことをあらわしている。後者は、安貞元年（一二二七）九月十六日条に「仰せを蒙るにより日入る以前に前殿に参り見参す。月昇りて退出す」とあるようなもので、例えば正治元年（一一九九）七月二一日条に「遅明嵯峨を出で、日出以後九条に帰る」と日の出入りが大体の時刻を表すのと同様の機能を持つている。

これに対し、『明月記』に特徴的な記述は、月が筆者定家の心情を表現する道具立てになつていたり、逆に月の様子から感慨を催されたりしたという記事である。『明月記』が現存する最も早い時期の治承四年（一一八〇）二月十四日条に「天晴れ。明月片雲なし。庭梅盛んに開き芬芳四散す。家中人なし。一身徘徊す」とあるのや、建永元年（一二〇六）五月十二日条の「天晴れ。新月明らかなり。懐旧の思いにより中御門殿に参り、前庭の月を望み独り襟を霑す。護摩僧最珍出で逢ふ。深更に帰る。漸くに旬月を送り、閑居寂寥たり。晝に前途後榮の憑みなきのみにあらず。天曙日暮ごとに、遠く慈悲の恩様に隔たり、恋慕の思ひ堪忍しがたし」といった記事が典型的なものである。これはさらに建仁二年（一二〇二）六月十一日条「旅亭番月明 单寝夏風清 遠水茫々處 望郷夢未成。おもかけはわか身はなれすたちそひて宮この月に今やねぬらむ」のように、月に思いを託した詩歌を作り日記に記述することにまでつながって行くのである。

これらに限らず『明月記』には「月明らかにして往事を思ふ」といった表現がまま見られるし、「思ひ」は記されなくても、とにかく月の様子（曇っている場合も含めて）の記事はほぼ全巻にわたって見られる。このような記述姿勢からおのずと「明月記」の名称が読者によって与えられたのであろう。

○藤原忠実の日記意識

十二世紀前半ころの撰関・藤原忠実の日記観を直接表すものとして、次の言に注目したい。久安四年（一一四八）の言談である。

仰云、日記ハあまたハ無益也。故殿仰ニハ日記多レハ思交テ失礼をするなり。西宮・北山ニハ作法ハ不遇（過力）。其外、家の日記の可入也。此三の日記たに有ハ凡不可事闕。他家日記ハ全無益也。其故ハ摂政関白主上の御前にて腹鼓打と云とも不可用之故也。又日記ハ委ハ不可書也。人之失又不可書。只公事をうるハしく可書也。（以下略）

『中外抄』上巻第七十八話

この言談で忠実は、日記の内容について、①「人之失」（公事儀式・年中行事における他人の失策のこと）は書くべきでないこと ②一般的にあまり詳しくは書かず、公事だけをきちんと書くべきこと、の二点を言っていると思われる。これについて『殿暦』で確認してみる。

まず①。忠実もちろん「人之失」を少しは記すが、天永三年（一一一二）の一年間で十数条というのが最も多いもので、大体は年に数か条ほど、なかには天仁元年（一一〇八）は十二月十六日に一条、同二年は皆無で、次の天永元年（一一一〇）も六月一日に一条のみという時期もあるくらいで、数自体が他の日記と比べると極端に少ない。しかもそれはあくまで公事の参考になる事実を記すという範囲に限られていて、その場に居合わせた人々の嘲笑などの反応は全く一例も記していない。これに対し「他家日記」は

次いで三位中将（基長）練り出でて参上す。爰に人々追ひ返す。仍つて月花門より西奔す。殿上・階下頤を解かざるはなし。賀表は是れ正員の公卿の進る所、非参議何ぞ

列に加わるべけんや。不覺の至りなり。

『江記』延久元年（二〇九六）十一月一日条）

のようにままそれを記す。忠実は「人之失」の記事が実用性だけでなく、「摂政関白」が「主上の御前にて腹鼓打」ったなどという記事に近い興味本位的な性格を持つことになりやすいと考えていたのであろう。

②については、その日の儀式について他の貴族に詳しく記させて自分自身は略記するという姿勢の见られることが注目される。たとえば、

須委記。雖然以新藤中納言（藤原宗忠のこと）令委記也。仍不記。但我身作法許ハ見之。

『殿曆』嘉承二年（一一〇七）一月十九日条）

所記大略許也。委不記。不審事ハ新藤中納言宗忠卿・右大弁時範記を引合可見也。

〔同年四月二十六日条〕

のようである。これは忠実ほどの地位があつて初めて可能なのであろうが、先述の日記観の反映でもある。

先の二点は『殿曆』において実際に確認でき、その特徴を示すものとも言えるだろう。